法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

離れの小屋を利用した在宅リモート・ワーク環境の職住分離境界 ： 茶庭露地の結界を事例として

上平田, 志郎 / Kamihirata, Shiro

(出版者 / Publisher)
法政大学大学院デザイン工学研究科
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学大学院紀要. デザイン工学研究科編 / Bulletin of graduate studies. Art and Technology
(巻 / Volume)
13
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
8
(発行年 / Year)
2024-03-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00030958

離れの小屋を利用した在宅リモート・ワーク環境の職住分離境界 —茶庭露地の結界を事例として—

"Implementing Work-Life Boundaries in Home-Based Work: A Case Study Applying the Japanese Tea Garden Model"

上平田 志郎
Shiro Kamihirata
主査　下吹越 武人　　副査　安藤 直見・網野 禎昭

法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻修士課程

The COVID-19 pandemic has accelerated a rapid shift towards telecommuting, subsequently blurring the distinction between professional and personal spaces. This study uniquely references the traditional Japanese architectural style of tea garden, exploring how its principles can be adapted to modern living spaces to aid in preserving the work-life balance of remote workers.

Key Words *: Work-Life Boundaries, Home-Based Work, Japanese Tea Garden, The Third Cabin*

1.　はじめに

（1）研究の背景

新型コロナ・ウイルス感染症（COVID-19）の世界的な流行に伴い，在宅リモート・ワーク勤務が急速に普及した（図. 1）．在宅リモート・ワークは，通勤のストレスを軽減し，柔軟な働き方を促進する一方で，職住空間の境界を曖昧にし，仕事とプライベートの気分の切り替えを困難にしている[1].

多くの労働者は，新型コロナ・ウイルスの急速な拡大により，在宅リモート・ワーク環境を整備するための十分な準備期間がないまま，在宅勤務への移行を迫られた. その結果，仕事空間と生活空間の明確な分離が困難になり，仕事とプライベートの気持ちの切り替えが円滑に行なえず，業務時間が終了したあとも仕事のストレスが持続し，健康的な生活が脅かされている.

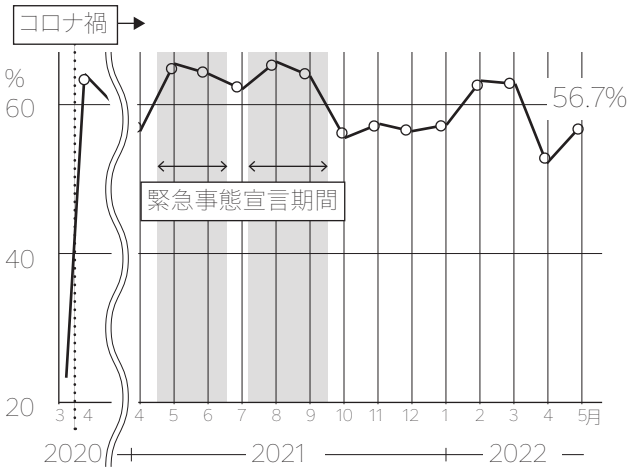


図. 1：コロナ禍以降の東京のテレワーク実施率推移
（東京都産業労働局テレワーク実施率調査[13]より作成）

（2）研究の目的

在宅リモート・ワークへの急速な移行がもたらした課題の中で，特に仕事空間と生活空間の境界の曖昧さが労働者のワークライフ・バランスに深刻な影響を与えている．本研究は，職住一体化が進行するリモート・ワークの住環境において，建築的な視点から多角的な分析を行い，在宅リモート・ワーカーが健康な生活を確保し，適切なワークライフ・バランスを実現するための職住空間の分離と境界設定に関する提案を行う.

（3）研究の方法

本研究では，里山地域における小屋住宅を対象とし，仕事空間（離れのリモート・ワーク小屋），生活空間（主屋），及びこれらの中間領域（庭）の3つの構成要素を設定した．中でも，中間領域としての庭の役割に着目し，庭を中心に，在宅リモート・ワークにおける仕事空間と生活空間の分離について検討した．庭を活用した空間分節の手法として，日本古来の建築様式である茶庭露地の空間構成を主な研究対象とした．茶庭露地の事例を分析し，その庭空間に実装される空間分節のための要素を抽出し整理した．抽出された分節要素は，KJ法やパターン化手法を用いて再構築しタイプ分けした．タイプ分けされた分節要素をリモート・ワークの庭に適用することで，主屋と離れの空間分節を試みた.

（4）既往研究と本論文の意義

空間の分節という視点から，茶庭露地と在宅勤務環境を関連付けて考察した既往研究は少ない．本研究では，在宅勤務，職住境界，茶庭露地など各領域における先行研究を個別に概観し，それらを多角的な視点から考察す

ることで，2つの空間の関連性を解明することを試みる．

在宅勤務に関する既往研究として，Holliss（2015）[2]は，職住同一空間での生活と労働が，現代のテクノロジーとライフスタイルの変化に適応する手段であると論じている．日本の町屋や建築家の仕事場などをとりあげ，在宅勤務における仕事と生活空間の境界のあり方を提示した．さらに，Workhome Pattern Book[3] の中で，在宅勤務者向けの住居設計パターンを体系化した．

武田（2022）[4]は，草庵露地から書院露地に至る茶事の変遷の過程で，露地が「用の庭」から「景の庭」に変化し，それに伴い露地の動線や空間のシーケンスが再構成されたことに言及している．露地の動線分析にあたっては，時代背景や様式性を十分考慮する必要があると指摘している．

中村（2002）ら[5]は，露地の飛石における注視行動に注目し，飛石の配置や役割付けによって，視点を操作し，空間が分節されると考察している．通路上の石の配置や構成を検討することで，リモート・ワークの庭の空間分節を制御できることを示す研究例である．

本論文では，聖域と俗界を分節する茶室露地を重要な建築事例としてとらえ，これを在宅リモート・ワーク空間に応用することで，住宅設計における新たな職住空間の可能性を探求する．伝統的な建築様式である茶庭露地と現代のリモート・ワーク住宅の統合を目指す本研究のアプローチは，ポストコロナの在宅リモート・ワークの空間設計に新たな視点をもたらすものである．

2.　ポストコロナの在宅リモート・ワークを取り巻く環境

（1）コロナ禍での在宅リモート・ワークの広がりと課題

株式会社リクルート住まいカンパニーの調査[6]では，テレワークに関する不満として，「オンオフの切り替えがしづらい」（38%）が最も多く，次いでスペース不足，家具・設備の問題や部屋間の「遮音性が低い」（13%）など，建築空間や設備に関する課題が指摘されている．今後の自宅環境の整備の意向については「仕事用の部屋をつくりたい」（19%）が最も多く，「部屋の一角に仕事用のスペースを作りたい」（12%）や「音の遮断性を整備したい」（8%）などが挙げられている．テレワークの実施場所については，「リビングダイニング」（55%）が最も多く，今後住みかえたい住宅への希望では，部屋数の増加やスペースの拡充が上位を占める一方で，通勤利便性よりも周辺環境を重視し，郊外や自然豊かな里山地域への移住意向も見受けられる．

日本労働組合総連合会（連合）が行ったテレワークに関する調査[7]では，テレワーク勤務に関する経験（図.2）について，「仕事とプライベートの時間の区別がつかなくなること」（71.2%）が最も多く，これに続いて「通常の勤務よりも長時間労働になること」（51.5%），「勤務時間外に仕事に関する連絡をとること」などが挙げられている．ここでも在宅リモート・ワークにおける仕事とプライベートの境界線の曖昧さ，ワークライフ・バランスの維持の困難さ，およびリモート・ワーク環境での時間管理の難しさが課題であることを示している．

生活への影響（図.3）について，「家族との会話が増えた」，「プライベートの充実につながった」などポジティブな声も多い一方，「家族のちょっとしたことでイライラするようになった」，「家族の喧嘩が増えた」などの課題も指摘されている．コロナ禍以降の在宅リモート・ワーク空間が，生活空間と明確に分離されていないことや，防音の不十分さなどにより，家族の生活にも影響を及ぼしている様子が推察される．

在宅リモート・ワーク下での残業について，残業時間を会社に申告しない（65.1%），申告しても会社に認められなかった（56.4%）など，残業が見えにくく申告しづらい，あるいは自分の時間管理の問題として処理しているなどの実態が報告されている．

これらの外部調査の結果を踏まえ，ポストコロナの在宅リモート・ワークの課題を以下のように整理した．

・仕事とプライベートの境界が曖昧

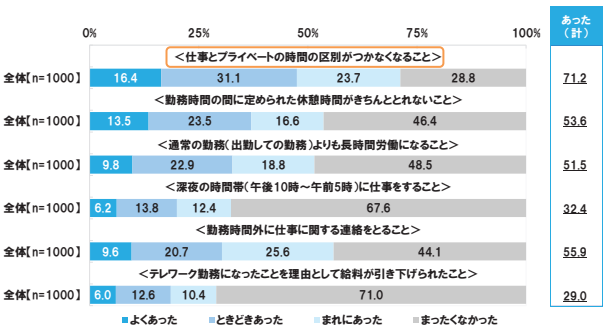
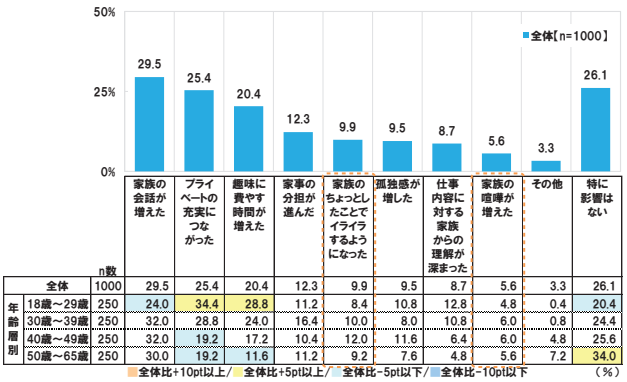


図.2：2020年の4月以降のテレワーク勤務に関する経験
［各単一回答形式］



	n数	家族の会話が増えた	プライベートの充実につながった	趣味に費やす時間が増えた	家事の分担が進んだ	家族のちょっとしたことでイライラするようになった	孤独感が増した	仕事内容に対する家族からの理解が深まった	家族の喧嘩が増えた	その他	特に影響はない
全体	1000	29.5	25.4	20.4	12.3	9.9	9.5	8.7	5.6	3.3	26.1
年齢層別 18歳～29歳	250	24.0	34.4	28.8	11.2	8.4	10.8	12.8	4.8	0.4	20.4
30歳～39歳	250	32.0	28.8	24.0	16.4	10.0	8.0	10.8	6.0	0.8	24.4
40歳～49歳	250	32.0	19.2	17.2	10.4	12.0	11.6	6.4	6.0	4.8	25.6
50歳～65歳	250	30.0	19.2	11.6	11.2	9.2	7.6	4.8	5.6	7.2	34.0

全体比+10pt以上／全体比+5pt以上／全体比-5pt以下／全体比-10pt以下

図.3：テレワークを行うようになったことで，生活（家族との生活）にどのような影響があったか
［複数回答形式］

出典：日本労働組合総連合会（連合），「テレワークに関する調査2020」，（2020年6月）

・仕事の明確な終わりが無く，一部で労働時間が増加の傾向

・時間外労働の無価値化

・不十分な在宅勤務専用の空間や設備

・家族への影響

(2) コロナ禍での在宅リモート・ワーク層の変容

国土交通省の調査[8]では，コロナ禍以降，自営型労働者と比較し，それまで在宅勤務率が低かった雇用型労働者のリモート・ワーク率が拡大していることが報告されている．また同調査において，大企業でのリモート・ワーク率が高く，企業規模が小さくなるほどリモート・ワーク率が低いことや，都市部でのリモート・ワーク率が高く，地方では低い傾向が報告されている．業種については，技術職，研究職，管理職などでリモート・ワーク率が高い傾向が見られる．

Bick et al. (2020)[9]は， コロナ・パンデミック後の在宅勤務可能性指標と実際の在宅勤務実施率を比較し，米国では高学歴，高収入，白人の労働者ほど在宅勤務に移行できていたことを報告している．

Dingel and Neiman (2020)[10]は，新型コロナ・ウイルス感染症のパンデミックによる在宅勤務への移行要因を検証し，飲食業や運搬，製造，農業系の業種では在宅勤務の可能性が低い一方で，ITや教育系，事務系の職業において在宅勤務の可能性が高いことを示している．また在宅勤務が出来ている就労者は，そうでない個人と比較し，一般的に高収入であると指摘している．

これらの調査結果から，ポストコロナにおけるリモート・ワークの広がりは，規模だけでなくその実態にも変化をもたらしていることを示している．その特徴を以下に整理した．

・都市部／大企業／事務系，IT系，研究職，管理職／雇用型労働者／ホワイト・カラー／高収入

3. 離れのリモート・ワーク小屋の庭と茶室の露地

本研究では，離れと主屋の間に位置する庭空間を，仕事空間と生活空間の分節機能を提供する重要な要素として位置付けている．庭を境界にした空間分節を研究する過程で，離れのリモート・ワーク小屋の環境と，茶室と露地（茶の湯の庭）の類似性に着目した（図.4）．

露地は茶室の庭であると同時に，茶室という聖域と俗界の間の緩衝領域としての機能を持ち，清めの場としての役割も果たす．露地を進むにつれて，人は世俗の塵を払い，茶の湯に臨む心の準備を整える．

露地には，数々の空間分節のための要素やふるまいが準備されている．露地は，住宅における空間分節の手本であり，その内容を理解することは，本稿の主目的であるリモート・ワーク小屋と主屋の空間的・心理的な分離という概念に重要な示唆を与える．露地の考え方は，現代の住宅における仕事とプライベートを区切るゆるやかな緩衝領域として応用できるものである．

まず，25の茶室露地の事例を収集し，それぞれの庭空間に配置されている空間分節要素について調査を行った（表.1）．この調査では，図.4に示した空間分節要素を重点的に抽出した．収集した事例の中から，詳細な図面情報が得られた24の事例を選定し，これらの分析結果を以下に示した（カッコ内は発生件数/母数）．

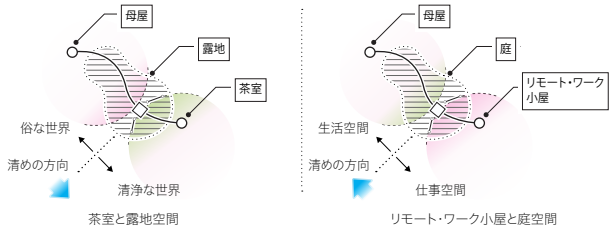


図.4: 茶室の露地とリモート・ワーク小屋の庭の比較

図.5: 露地のモデル化要素

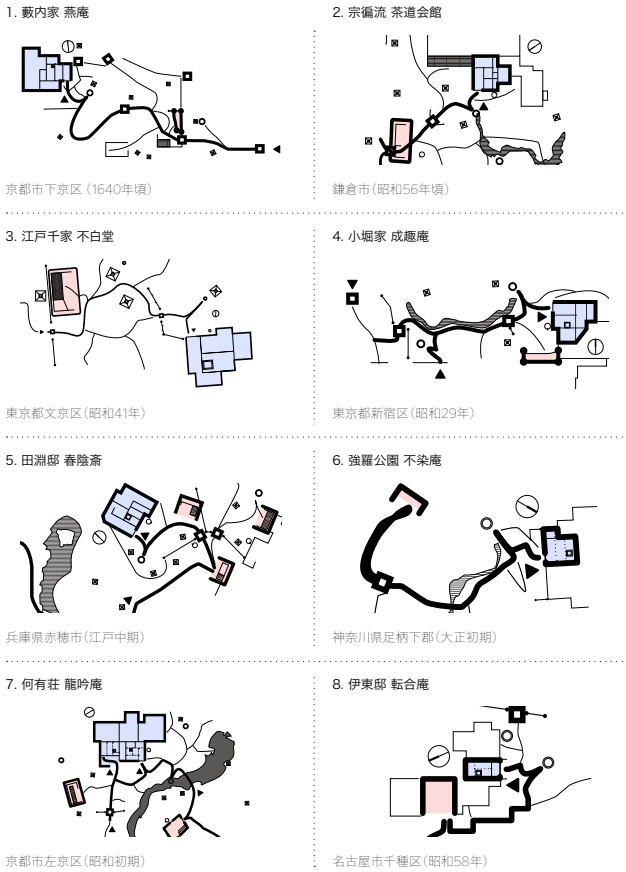


図.6: 露地の動線モデル[14]（抜粋）

参考：中村 昌生，西澤文隆，日本庭園集成 第4巻 茶庭，小学館，1985図面を元に作成

表. 1：露地の境界要素の実装状況[15, 16]

茶庭	所在地	作庭年	露地直線距離(m)*1	門						戸						水				清め			照明	動線			待合・休憩				その他の境界要素
				梅見門	網笠門	茅葺門	中潜り	中潜り(腰掛一体)	その他	枝折戸	猿戸	網代戸	簀戸	揚簀戸	その他	流れ	枯れ流れ	池	橋	蹲踞	手水鉢	塵穴	石灯籠	飛石	畳石	延段	腰掛(外露地)	腰掛(内露地)	雪隠	風呂	刀掛け
藪内家 燕庵	京都市下京区	1640年頃	22.3(数寄屋門から)	●				●			●									●	●		●	●	●	●	●	●	●		●
宗徧流 茶道会館	鎌倉市	昭和56年頃	14.6(玄関口から)	●				●		●						●	●			●		●	●	●	●	●	●				
江戸千家 不白堂	東京都文京区	昭和41年	8.3(露地門から)						●	●										●		●	●	●			●				
小堀家 成趣庵	東京都新宿区	昭和29年	16.6(正門から)							●	●					●				●	●	●	●	●		●		●			
田淵邸 春陰斎	兵庫県赤穂市	江戸中期	16.4(書院出口から)				●			●								●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●		
強羅公園 不染庵	神奈川県足柄下郡	大正初期	39.6(露地門から)	●											●	●				●	●		●	●	●		●		●	●	
何有荘 龍吟庵	京都市左京区	昭和初期	25.6(残月亭手前石橋から)			●	●									●			●	●		●	●	●	●		●	●			
伊東邸 転合庵	名古屋市千種区	昭和58年	15.2(露地門から)	●						●										●				●		●					
瀬川邸 一指庵	東京都文京区	昭和初期	16.8(主座敷出口から)							●					●	●				●			●	●		●	●		●		
角田邸 蕪庵	横浜市港北区	昭和56年	11.9(縁側出口から)	●						●						●		●	●	●		●	●	●	●	●	●		●		
獨楽庵	東京都八王子市	昭和56年	17.5(露地入口から)						●	●						●				●		●	●	●	●		●				
中里邸 壺中庵	佐賀県唐津市	昭和56年	5.9(広間出口から)							●						●				●		●	●	●			●	●			
金澤邸 方圓庵	京都市下京区	昭和11年	5.6(広間出口から)							●										●		●	●	●	●	●	●				
京大和 翠紅庵	京都市東山区	不明	20.6(露地門から)	●											●	●				●		●	●	●	●	●	●		●		
美濃幸	京都市東山区	昭和3年	14.2(12帖広間出口から)							●						●			●	●		●	●	●	●	●	●				
中埜邸 清心庵	愛知県半田市	昭和10年頃	10.8(露地門から)						●								●			●		●	●	●		●	●		●		
谷村邸 加賀待庵	金沢市小立野	昭和48年	8.6(広間出口から)								●									●			●	●	●		●		●		
表千家 不審菴	京都市上京区	1700年頃	26.6(露地門から)	●			●										●			●		●	●	●			●	●	●		●
青岸渡寺 瀧寿庵	和歌山県西牟婁郡	昭和53年	14.1(露地門から)								●									●		●	●	●	●	●	●				
箱根美術館 山月庵	神奈川県足柄下郡	昭和25年	20.3(露地門から)	●											●					●		●	●	●	●	●	●	●	●		
武者小路千家 官休庵	京都市上京区	大正15年	22.7(露地口から)		●										●				●	●		●	●	●	●	●	●	●	●		
裏千家 又隠	京都市上京区	1653	N/A(スケール不明)						●		●									●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●(今日庵)
仁和寺 遼廓亭	京都市右京区	江戸中期	13.9(露地口から)						●							●				●	●			●	●	●					●
妙喜庵 待庵	京都府大山崎町	桃山	18.7(露地口から)												●					●		●	●	●		●					

*1. 図面より計測した躙口までの距離概算

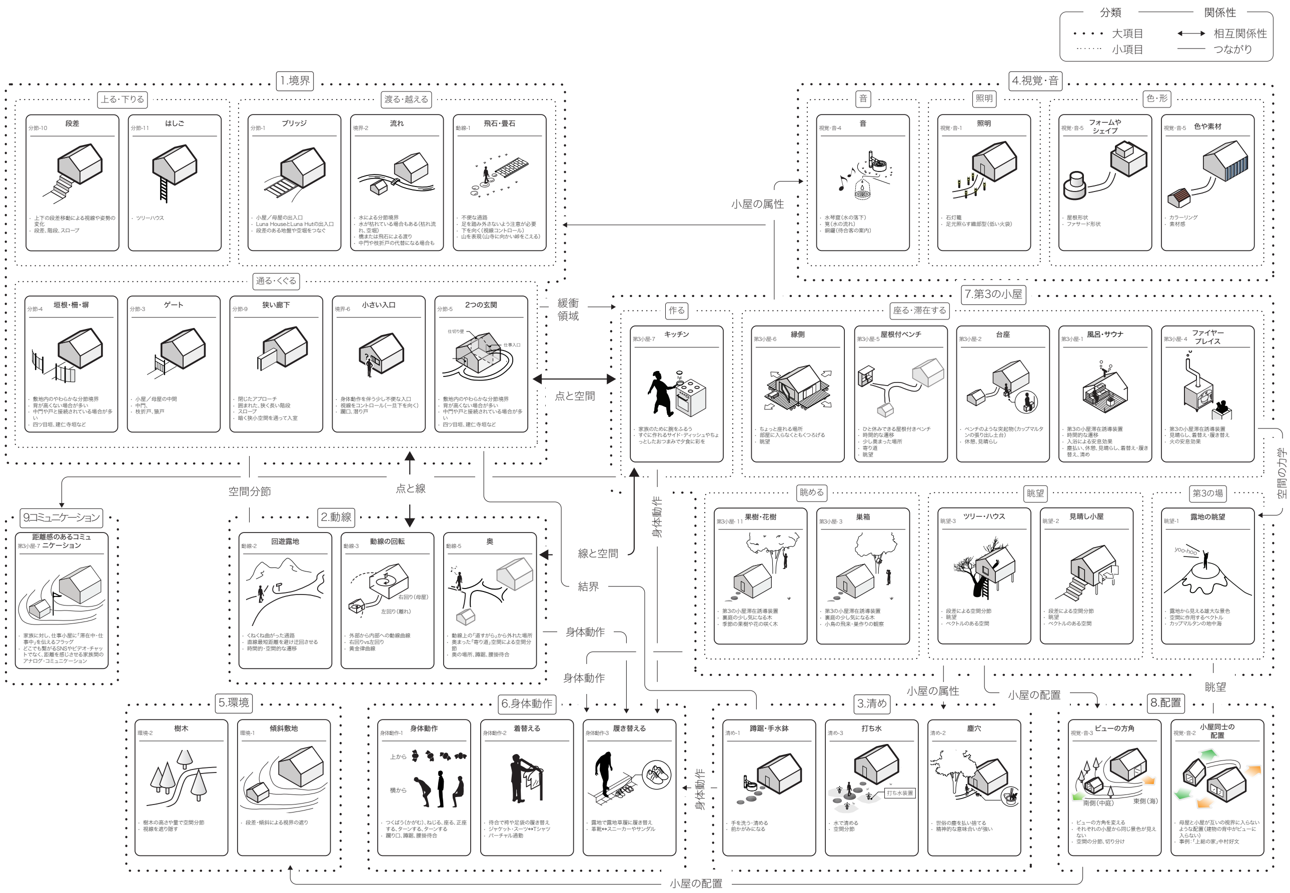


図. 7：空間分節要素の分類カード

・蹲踞と飛石は調査したすべての露地に存在した（24/24）

・門や戸など，いずれかのゲート要素は，調査したすべての露地に存在した（24/24）

・戸では枝折戸や猿戸（15/24），門では梅見門（8/24）の使用が多く見られた

・畳石や延段は多くの露地で採用されており，飛石とのコンビネーションで用いられている（17/24）

・腰掛待合は多くの露地で設置されていたが，一部設置されない露地もあった（原因として草庵／書院という時代性や移築時の問題が指摘されている）（22/24）

・石灯籠は多くの露地で設置されている（22/24）

・塵穴（18/24）や雪隠（12/24）も多くの露地で設置されている．

4.　露地境界を持つ小屋事例

茶庭の事例と同様に，茶庭露地に通じる分節境界要素を持った現代住宅の事例を調査した．これらの住宅事例には以下のものが含まれる．

・Luna Hut（中村好文，2012）

・上総の家（中村好文，1992）

・カップマルタンの休暇小屋（ル・コルビュジェ，1952）

・絵画のための見晴らし小屋（母袋俊也，1999-2004）

5.　リモート・ワーク露地の空間分節要素

（1）空間分節要素の抽出

露地の事例や小屋の事例の調査から，空間を隔てるための様々な分節要素が確認された．この章ではこれらの空間分節要素を，現代の主屋と離れのリモート・ワーク小屋の間の庭（リモート・ワーク露地と呼ぶ）に適用することを試みた．

抽出された空間分節要素を整理し，互いの関連性を考察した．分析に際しては，川喜田のKJ法[11]や伊庭のパターン化手法[12]などを参考にし，各空間分節要素を１枚のパターン・カードとして表現しグルーピングした（図.7）．

各要素の分類を検討するにあたって，まずこれらのカードを，それぞれもっとも類似な内容を持つと考えられるカードごとに小分類にグループ化（細点線で囲まれたグループ）し，グループ名を付けた．互いに近接なグループがあると認められた小分類グループについては，より大きな大分類（太い点線）グループへと再グループ化した．大分類にはそれぞれカテゴリー名を付け，グループごとの関係性を矢印で示した．

（2）6つのゾーンと第3の場

空間分節装置を整理し，再構築する中で，リモート・ワーク露地における，「6つのゾーン」と「第3の場」という空間概念が認められた．

6.　6つのゾーン

再構成された空間分節要素のパターン・カードをリモート・ワーク露地モデルに配置した（図.8）．その結果，リモート・ワーク露地は6つのゾーンに分類され，その組み合わせにより構成されることが推察された．

1. 生活ゾーン：
   主屋を中心とするプライベートな生活空間
2. 仕事ゾーン：
   在宅リモート・ワーク小屋を中心とする仕事空間
3. 回遊ゾーン：
   主屋と在宅リモート・ワークの小屋の間にある庭，および回遊動線
4. ゲート・ゾーン：
   仕事空間と生活空間を分ける分節装置（垣根や塀・戸・門などのゲート要素や，流れ・橋）
5. 清めゾーン：
   仕事からプライベート空間に戻る要所で，心身を清め仕事の埃塵を払い落とす場
6. 第3の場：
   仕事から生活空間に戻る際に，その中間に存在する緩衝領域．仕事空間にも生活空間にも属さない，ニュートラルで役割の無い場所

これらの分析結果を茶庭露地の事例に適用し，6つのゾーンという観点から露地ごとの特性を調査した．6つのゾーンが適用されるシーケンスとそれぞれのゾーンの相対的な強さ（分節要素の規模，数，分節強度）を図.9に示した．それぞれの露地は6つのゾーンを組み合わせて配置しながら，その強度やシーケンス，出現頻度を調整することで，特色のある個性的な庭を構成していることが考察された．

7.　第3の小屋

a）第3の場

コロナ禍以前は，都市部の多くの労働者は1時間前後の通勤をし，その中でなかば無意識のうちに，緩やかな気分の転換を行なっていた．リモート・ワーク露地は，自宅敷地内の移動であり，仕事からプライベートへの気分の切り替えという観点では，距離的にも時間的にも，従来の通勤には及ばない．

パターン・カードの分析から，リモート・ワーク露地には，庭以外にも，何らかの中間領域あるいはバッファー空間が必要であることが推察された．これは茶庭における腰掛待合のような空間であり，茶室にも主屋にも属さない中立的な場を意味する．そこは一時滞在し，緩やかに気分を切り替えるための役割を提供する．本論文ではこのような空間や設備を「第3の場」と呼ぶ．

b）第3の小屋

主屋，リモート・ワーク小屋に続き，「第3の場」を形

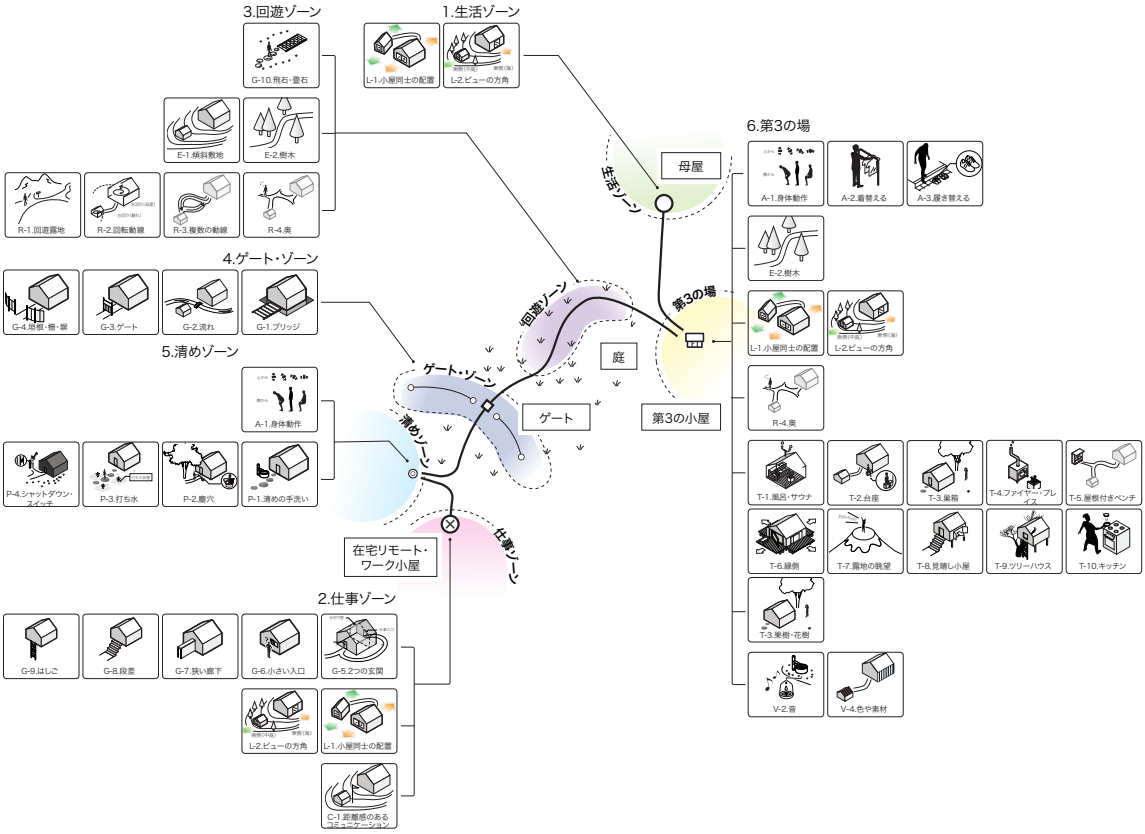


図. 8：空間分節要素の配置と6つのゾーン

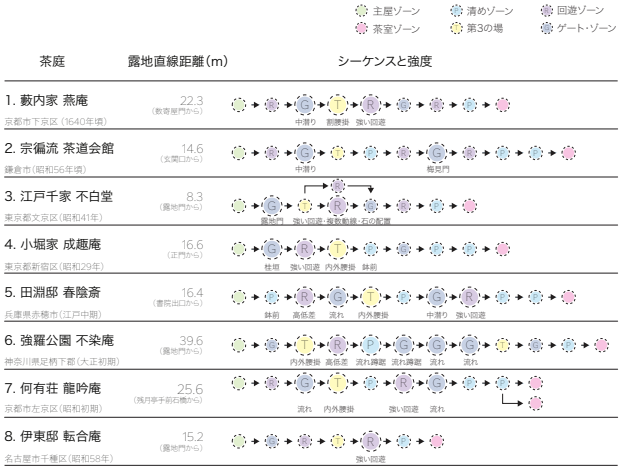


図. 9：露地における6つのゾーンのシーケンスと強度

成する3つ目の小屋を「第3の小屋」と呼んだ．

オルデンバーグの「サードプレイス」や磯村の「第3の空間」は，家庭と職場の中間に位置する3つ目の居場所や空間を定義した．茶庭露地における「腰掛待合」も，　茶室空間にも生活空間にも属さない中間領域であり，緩やかに，茶の湯への心の準備を整えるための公共空間としての役割を提供している．

ポストコロナの在宅リモート・ワークでは，「通勤」という時間的・距離的な緩衝領域が失われた．自宅の敷地（リモート・ワーク露地）の閉じた狭い空間の中に「第3の小屋」を配置することは，家庭対職場，あるいは主屋対在宅リモート・ワーク小屋という単純な2項対立の関係性しか持たなかった場の中に，ニュートラルな空地を導入し，リモート・ワーク露地全体に，新たな空間バランスを創出する試みである．これにより，リモート・ワーク露地における対立的な空間関係は緩和され，リモート・ワーカーは，仕事と生活のいずれにも属さない第3の方向へと気持ちを向けることが可能となり，仕事から生活へとスムーズな気分の切り替えが可能になる．

8.　リモート・ワーク露地の空間分節設計

（1）ダイアグラムによるモデリング

リモート・ワーク露地をダイアグラム化し，各空間分節要素をシーケンスに分けて適用した例を図. 10に示す．それぞれのステップごとに，操作するゾーン対象を分けることで，シーケンスを汎用化し，操作がシンプルになるようにした．各ステップにおいて適用した空間分節要素をパターン・カードで示した．

図. 10は，パターン・カードの適用の一例であり，どのパターン・カードをどのシーケンスで適用するかは様々なバリエーションが考えられる．6つのゾーンによる構成を，リモート・ワーク露地の基本的な建築様式として捉え，それぞれのゾーンに対し，パターン・カードにタイポロジー化された空間分節要素を適用することで，在宅勤務の庭の設計を一般化した．

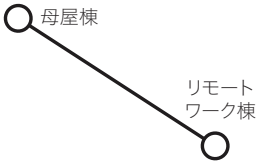
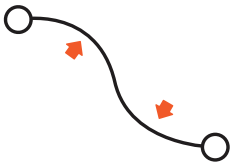
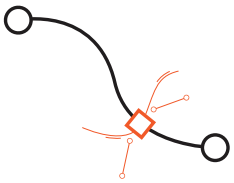
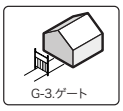
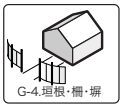
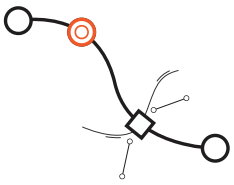
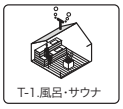
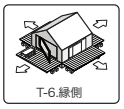
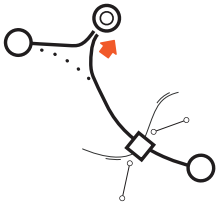
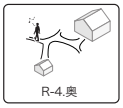
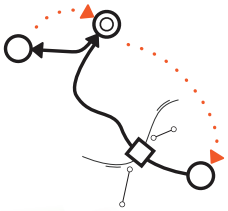
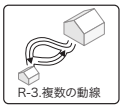
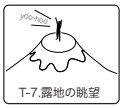
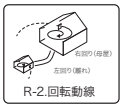
要素	モデル図	境界要素
1 基本要素の設置 仕事ゾーン(リモート・ワーク棟)と生活ゾーン(母屋棟)を設定し, その間に基本動線を配置		
2 動線要素の導入 回遊ゾーンに,「R-1.回遊露地」要素を追加し, 回遊動線を導入		
3 分節要素の配置 ゲート・ゾーンに,「B-3.ゲート」,「B-2.流れ」,「B-4.垣根」,「B-10.飛石」要素を設定		 
4 第3の小屋の設置 第3の場に,「T-1.風呂」,「T-3.巣箱」,「T-6.縁側」を配置。「A-2.着替える」「A-3.履き替える」を追加		 
5 動線要素の調整 回遊ゾーンに「R-4.奥」を適用し, 第3の小屋の位置を奥に押し込み, 動線を調整		
6 ルート分けと玄関分離 「R-3」で行きと帰りのルートを分離. 「B-5」で行きと帰りの玄関分離. 行きはシンプル直線, 帰りは回遊曲線		
7 ビューと回遊動線の流れ 行き動線に樹木を配置, 帰り動線をさらに奥に押し込み回遊性を高める. 部屋からのビューが同方向にならないよう調整. 室内動線の回り方向を調整		 

図. 10: 空間分節要素の露地ダイアグラムへの適用例

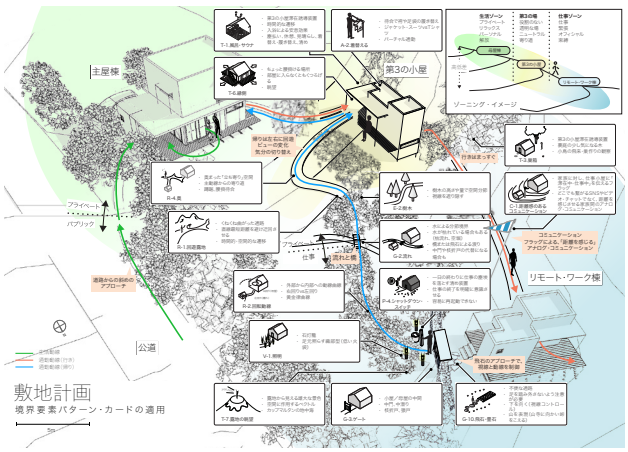


図.11: 空間分節要素のリモート・ワーク露地への適用例

（2）リモート・ワーク露地への適用

ダイアグラムへの適用結果を，実際の敷地に適用した3Dパース図を図.11に示す．

前面道路から主屋棟へは緩やかな右カーブ動線で入室し，右回転の室内動線を形成している．それぞれの棟で出入口を分け，仕事に向かう動線と帰宅動線を分割している．「第3の小屋」は，仕事に向かう際は着替えや履き替えの身体動作が容易になるようシンプルな通り抜け動線で結び，帰宅の際には主要動線から奥の位置にずらし，寄り道をするような感覚を誘導している．第3の小屋は，一定時間滞在し，ゆるやかな気持ちの切り替えが出来る場所として，籠り感を感じられるような配置としている．

9. 結論

（1）研究のまとめ

本研究は，新型コロナ・ウイルス感染症の拡大を背景に，在宅リモート・ワークにおける職住分離の課題に焦点を当てた．コロナ禍以後の在宅リモート・ワークにおいては，仕事とプライベートの境界が曖昧になる傾向が指摘されており，労働者のワークライフ・バランスや健康的な生活に影響を与えている．

本論文では，離れに設けられたリモート・ワーク小屋とその庭を活用して，仕事空間と生活空間の分節を検討した．空間分節の手法として，日本古来の建築様式を持つ茶庭である露地の建築様式を分析し，リモート・ワークの庭への適用可能性を検討した．

露地の事例から，茶の湯の庭における空間分節要素を抽出し，パターン・カード化した．この過程で，「6つのゾーン」，「清めゾーン」，「第3の場」といった新しい概念を明らかにした．6つのゾーンは，その空間特性に応じてシーケンスや強度を制御することにより，リモート・ワーク露地の設計手順を一般化できる可能性を示唆している．

最後に，抽出したパターン・カードを，ダイアグラムを用いてリモート・ワークの庭に適用して検証した．

本研究は，従来の茶庭露地に関する研究と現代の住宅設計の融合を目指したものであり，ポストコロナ時代の在宅リモート・ワーク空間設計の新たな視点を提供するものである．

（2）今後の展望

本研究は，里山地域のリモート・ワーク露地のコンセプト・モデルを提示したものであるが，「6つのゾーン」や「第3の場」の概念は，都市部の一般住宅における在宅勤務空間の設計にも応用できる可能性を示唆している．

一方で，本研究の内容は，概念レベルの検討にとどまっており，より具体的な設計案を提示するには至っていない．また対象ペルソナ像の設定が限定的であり，幼少期の子を持つ子育て共働き世代などの在宅勤務環境においてはより広範な条件を検討する必要がある．今後，多様な環境に適応できる一般化モデルへと発展させるためにさらなる研究が求められる．

参考文献

1) 日本労働組合総連合会（連合）,テレワークに関する調査2020, p.7, 2020
2) Frances Holliss: Beyond Live/work - the architecture of home-based work, Routledge, p.8, 2015
3) The Workhome Project, WORKHOME PATTERN BOOK, London Metropolitan University, http://www.theworkhome.com/pattern-book/, 2024年1月2日参照
4) 武田隆司:茶庭の動線の変遷と出雲流庭園, 島根県技術士会 庭園文化研究分科会, 2022
5) 中村 祐記, 岡崎 甚幸, 鈴木 利友: 茶室露地における飛石歩行の際の注視行動, 日本建築学会計画系論文集, 2002
6) 株式会社リクルート住まいカンパニー,「新型コロナ禍を受けたテレワーク×住まいの意識・実態」調査, 2020
7) 日本労働組合総連合会, 前掲, (2020) , pp.5-9
8) 国土交通省, 令和４年度テレワーク人口実態調査－調査結果（概要）－, 国土交通省, 令和５年3月,pp.8-11
9) Bick, Alexander. Adam Blandin and Karel Mertens: “Work from Home after the Covid-19 Outbreak”, CEPR Discussion Paper, No.15000, 2020
10) Dingel, Jonathan I. and Brent Neiman: “How Many Jobs Can be Done at Home?”, NBER Working Paper No.26948, 2020
11) 川喜田二郎: 新発想法 KJ法の展開と応用,中央公論社, 1970
12) 井庭 崇, 鈴木 寛, 岩瀬 直樹, 今井 むつみ, 市川 力: クリエイティブ・ラーニング:創造社会の学びと教育, 慶応義塾大学出版株式会社, 2019
13) 東京都,都政情報 2022年06月14日報道発表資料 テレワーク実施率調査結果, 2022, https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/hodohappyo/press/2022/06/14/07.html, 2023年1月2日参照
14) 中村 昌生, 西澤文隆: 日本庭園集成 第4巻 茶庭, 小学館, 1985
15) 同上
16) 重森三玲: 実測図日本の名園, 誠文堂新光社, 1971